



## おもてなしの心

明治大学情報コミュニケーション学部1年

前澤俊

私がASEAN研修プログラムの中で最も印象的に残っていることは、シーナカリンウィロート大学の学生たちが11日間心を込めて私たちの滞在をサポートしてくれたことです。

バンコクへ向かう機内の途中、日曜日が一日フリーであることがずっと楽しみであり気がりでもありません。「もし学生たちと馴染めなかったら一日中一人でホテルに籠ることになる…」と考えていたからです。しかし翌日、そんな気気りはきれいに吹き飛んでいきました。彼らの類稀なるコミュニケーション能力の高さ、日本のことが好きでもっと知りたいのだという気迫。それらに圧倒された私は当初彼らについていくことで精一杯でした。



彼らは常に全力で私のサポートをしてくれました。出会った翌日にはタイ人1人で日本人6人を相手にし、地下鉄を使ってデパートへ連れて行ってくれたりもしました。彼らのサポートの手厚さは、真のおもてなしの国は日本でなくタイだと思いなおすほどでした。「何とかして彼らの気迫に応えたい」その一心で私も全力で11日間彼らと向き合っていました。

羽田へ向かう機内の途中、私は彼らと全力で向き合った11日間を振り返っていました。拙い英語と僅かばかりのタイ語の知識を総動員して彼らが何を伝えようとしているのか、どのように伝えれば相手に伝わるのか、ほとんどこれらの作業しかしていないと気づき、またそれらは今まで自分が疎かにしてきた作業であるとも感じました。彼らが6月に来日した時、自分は彼らのようなサポートができていただろうか。そう考えると、彼らには申し訳ない気持ちでいっぱいになるのです。

タイの人々のあたたかさ、自分が余りにも未熟だったという事実。短期留学しなければ見過ごしていた大切なことに彼らのサポートは気づかせてくれました。